

歯科衛生だより

発行人/武井 典子
発行/公益社団法人 日本歯科衛生士会
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-11-19
TEL.03(3209)8020 FAX.03(3209)8023
http://www.jdha.or.jp/

2019 February vol.49

超高齢社会における歯科インプラント ～ 定期的な口腔健康管理が何より大切!～

米山歯科クリニック 院長 米山 武義

超高齢社会と歯科インプラント

我々が想像する以上に我が国の高齢化の波は急激です。(図1)。この変化は医療の世界にも確実に影響を与え、歯科医院でもさまざまな対応を迫られる時代に入りました。

最近、脳梗塞等の後遺症があり、家族に支えられながら来院される方が多くなってきました(図2)。そしてそのほとんどの方が、多数の薬剤を服用しており、歯肉が発赤、腫脹している方も珍しくありません。38年前に特別養護老人ホームで私が初めて経験した高齢者の方の口腔内と比較して、明らかに違うことは残っている歯の増加、そして歯肉の炎症が頻繁に認められることであります。我々歯科関係者は歯を残すことがもっとも重要な使命であると考え、口腔保健の実践に努めてきました。しかし、問題は歯の数ではなく、どのような状態で歯が維持されているかが重要であることが叫ばれるよ



図2 診療室に来院する患者さんの高齢化が進み、近い将来通院が困難になる方が増えると予測されます。

うになってきました。翻って歯科インプラントも植立しているかどうかではなく、どのように機能し、食生活を支えているかが重要であります。さらに言えばインプラントが口腔および全身の感染症の原因になっていないことが大切です。患者さんは必ず高齢化し、いくつかの病気を抱え、身体の介護を必要とし、最期を迎えるという生物としての避けられない過程を歩んでいます。これからは患者さんの将来の姿を想像すべきであり、何が患者さんにとって大切かを考えなければならないと思います。素晴らしいインプラント治療を社会の中で価値ある治療の一つとして実践するために、超高齢社会におけるインプラントについて考えていきたいと思ひます。

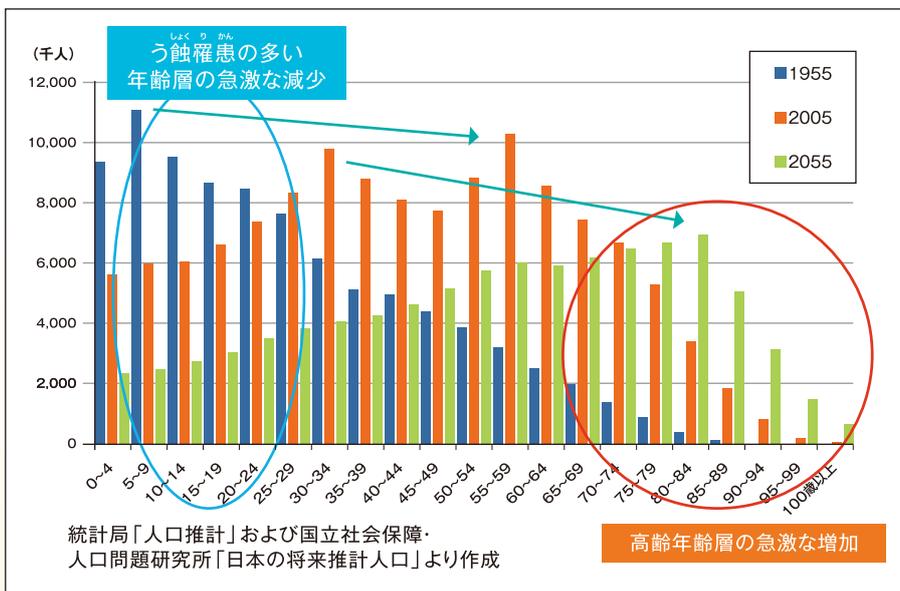


図1.各年齢群別人口の推移
我が国の高齢化は急速に進み、人口の年齢構成が様変わりしていきます。

歯科インプラントの歴史と評価

インプラントには専門的に骨内インプラント、骨膜下インプラント、歯内骨内インプラントと呼ばれるタイプがありますが、今日、インプラントと言えばおおむね骨内インプラントを指しています。骨内インプラントの原型は、骨と直接接触するオッセオ インテグレイテッド インプラントに代表されます。そして現在インプラント体のデザインに

ついでにはチタン製のスクリータイプインプラント(フィクスチャー)に集約されています。

スウェーデン王立イェテボリ大学のBrånemark教授が提唱したオッセオ インテグレーション(骨と一体化した状態)の確立とその後の技術進歩がインプラント治療の高い予知性の基礎となっています。1988年のNIH・コンセンサス会議以降、「臨床的に動かない」インプラントが世界中で成功とみなされるようになり、1998年のトロント会議では「患者と歯科医師の両者が満足する機能的および審美的な上部構造をよく支えるオッセオ インテグレイテッド インプラントが成功である」と合意され、世界が認めるインプラントの新しい成功基準となりました。しかしその後、インプラント周囲の炎症の有無が成功基準の一つに加えられる傾向にあり、炎症をいかに抑えられるかが学会の関心事になっています。

何より定期的な継続した管理が大切

インプラントを長持ちさせ、しっかり噛める状態に維持するには、何より日々のていねいなセルフケアが大切です。しかし自分でケアをしても、みがき残しにより、炎症を発生させてしまう可能性がありますので、個人差がありますが定期的な(3か月から6か月に1回)歯科医師、歯科衛生士による管理が重要です。このルールを忘れますと、自分の歯(天然歯)より炎症が急速に進行することがありますので、歯科医院を定期的に通院することをお勧めします。これまでインプラント治療を受けられた方で、しっかりルールを守り、セルフケアをしっかりと行い、



図3

しっかりセルフケアを行い、定期的にプロフェッショナルケアを受けられている方は、安心してインプラントをお使いになっている方が多いです(この方は78歳女性です)。

プロフェッショナルケアを受けられている方と治療が終わって定期的な検診を受けておられない方は、インプラントの周囲組織の健康状態に大きな開きが認められます(図3)。メンテナンスの効果は天然歯と同等かそれ以上かもしれません。インプラントの周囲の炎症が悪化するとインプラントを支えている骨に炎症が

波及び、インプラント周囲の腫れや疼痛でつらい思いを経験されることがあります。残念な結果としてインプラントを支えている骨がなくなり、除去せざるを得なくなります。

超高齢社会で起こりうる一つのケース

インプラント治療の素晴らしさを経験し、患者さんから喜びの声を聞くことが多い中で、思わぬケースに遭遇したとき、心を悩ませてしまいます。数は少ないですが超高齢社会の中で実際に経験した一つのケースをご紹介します。

*通院が困難になりメンテナンスが難しくなりつつある方のケース

関西でインプラントを埋入してもらいましたが老後のことを考え、娘さんが住む静岡に転居。本人のご希望により独居。スクリー固定タイプのインプラントの上部構造(被せ物)を外し、これまでのようにきれいに清掃してほしいという希望で来院されました。几帳面にメンテナンスに通院されますが、「来られなくなったらどうなるかいつも心配しています。定期的に外してほしいにしてもらわないとすごく不安です」と訴えられます。そんなある日、定時になっても診療室にいらっしゃらないので心配になり、携帯電話に連絡をしたところ、近くの交差点でうずくまっていたとのこと。その後、何事もなく来院されましたが、本人の強い希望により上部補綴物を外し、メンテナンスを行いました。本人が「通院できなくなったらどうなるか」を心配しているので、必要に応じてご自宅に訪問をしますので安心してくださると伝えたら、安どの表情を浮かべられました。このように、心身の疾病や障害のために通院が困難になるケースが増えてくると思います。

超高齢社会におけるソリューション(解決法)の提案

我が国における高齢化の波は避けられません。医療と介護についても「いつか来るだろうが、私は大丈夫、今は大丈夫」



日本歯科医師会製作『笑顔の向こうに』が第16回モナコ国際映画祭でグランプリ受賞

日本歯科医師会が製作した映画『笑顔の向こうに』が、第16回モナコ国際映画祭でグランプリを受賞しました。映画は、歯科医療の重要性や歯科衛生士・歯科技工士の仕事の大切さや成長を描いた青春感動ストーリーです。今年2月15日より全国のイオンシネマで公開されます。歯科衛生士の仕事を理解いただくために、中・高校生や保護者へ積極的にPRしていただけることを願っています。

日本歯科衛生士会 会長 武井 典子

と思っている方がほとんどです。しかし近年、これまで危惧してきた出来事が医療の現場等で起き始めています。病院のICU(集中治療室)に勤務している友人の歯科衛生士から「先生、最近ICUに入院する患者さんでインプラントを入れている人が増えています。看護師さんは気づかないのですが、歯科衛生士として何か将来が不安です」と連絡してきました。在宅医療を担っている歯科医師の一人として、インプラント治療にも出口戦略(超高齢社会における戦略・高齢者になった時の対策)が必要だと感じます(図4)。我が国の人口の高齢化を真剣に受け止め、歯科医療関係者は患者さんと共にインプラントを人生の最後まで安心して享受できる出口戦略を立てなければなりません。



図4

介護を受けられる状態になっても、歯科衛生士による定期的な口腔衛生管理は非常に重要です。(開口保持器具を使い、奥歯までしっかり歯ブラシを当てています。)

そこで大切なことをまとめてみます。

1. インプラント治療は生涯にわたるものであるという認識を患者さん、歯科医療者が共有する
2. インプラント治療のアドバンテージとリスクについてしっかり患者さんに説明し、同意を得る
3. 術前、術中、術後、メンテナンスにおいて感染予防対策を徹底する
4. MRONJ(薬剤関連性顎骨壊死)を引き起こす恐れのある薬剤を服用する場合、必ず連絡をとるように患者さんに説明する
5. 定期的なメンテナンスケアの重要性をしっかりと説明し、同意をいただく

6. 不安なことがあったら、必ず連絡をいただき、ホームドクターとしての関係を大切にする
7. 高齢化に伴い、より管理しやすい補綴物(被せ物)の形態を考案し、簡素化された補綴物(被せ物)に置き換えていく
8. 入院したり、施設等に入所する場合、連絡をいただく
9. 必要な場合、訪問診療ができる体制を構築する。それができなければ在宅歯科医療を担う歯科医療機関と連携を図る
10. 社会の中でインプラント治療は価値ある治療法であるが、継続的に管理してはじめてその価値が高まることをアピールする

終わりに

インプラント治療は歯を失った時の素晴らしい治療法の一つであり、多くの国民に自分の歯と同じように美味しいものをしっかり食べられるという夢を現実のものにしてくれました。しかし超高齢社会の中で再びハードルを上げなければならない時が来ました。それは患者さんが高齢化し、看護や介護を受ける方々が増えてきたという現実です。そしてどのような環境になろうともインプラントを安心して使っていただけるような、手段と社会的なシステムを築くことが重要になってきました。患者さんと信頼関係を持ち、ともに将来起こりうるいろいろな可能性を話し合いながら、対策を立てていく時代になったといえます。すべては予測と予防、もしもの時の対策(リスク管理)に尽きると思います。この難題を克服したとき、日本から世界に向けて超高齢社会におけるインプラント治療のあるべき姿を発信できると確信します。